

2021年2月28日 説教「ともにいて下さる主」

創世記 48章 13～22節

147歳のヤコブの死の床に息子二人とやって来たヨセフ。彼らの子を加えることと母ラケルのことを伝えられ、主なる神の前にひれ伏しました。

1. ヨセフ家に対する祝福 (13～16節)

- ①二人を両横に (13) 「それからヨセフはふたりを、エフライムは自分の右手を取ってイスラエルの左手に向かわせ、マナセは自分の左手に取ってイスラエルの右手に向かわせて、彼に近寄せた。」ヨセフは床の左側にエフライムを左側にマナセを立たせました。そうすれば、父イスラエル(ヤコブ)の右手で、長男マナセを祝福しやすくなるからです。子供たちもそのことは理解していましたから異存はありません。エジプトに育った子供達は言われるがままであったことでしょう。
- ②手を交差して (14) 「すると、イスラエルは、右手を伸ばして、弟であるエフライムの頭の上に置き、左手をマナセの頭の上に置いた。マナセが長子であるのに、彼は手を交差して置いたのである。」ところが父イスラエルは右手を、床の左側にいるヨセフの次男エフライムの頭に置き、左手を床の右側にいる長男マナセの頭の上に置いたのです。長子マナセにヤコブの右手をおけば、長子の件は当然マナセになりますが、このままなら、弟の方にその権利が与えられるようになってしまいます。でも、わざわざ手を交差してそのようにしているのです。
- ③ヨセフを祝福し (15～16) 「それから、ヨセフを祝福して言った。『私の先祖アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神。きょうのこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神。すべてのわざわいから私を贖われた御使い。この子どもたちを祝福してください。私の名が先祖アブラハムとイサクの名とともに、彼のうちにとなえ続けられますように。また彼らが地のまなかで、豊かにふえますように。』」二人の子達に手を置いた上で、祝福は彼らの父ヨセフに向けられました。イスラエルは神を三つの名で呼びかけています。第一にアブラハムとイサクの神、第二に羊飼いなる神(自分たちを守り導いてくれる方)、第三に災いから贖われた御使い(直接にとりなしてく下さる主)。主に呼びかけたイスラエルは祝福がヨセフの家にあり、子達に受け継がれ、増え広がっていくようにと祈ったのです。

2. エフライムとマナセ (17～19節)

- ①手をつかみ (17) 「ヨセフは父が右手をエフライムの頭の上に置いたのを見て、それはまちがっていると思い、父の手をつかんで、それをエフライムの頭からマナセの頭に移そうとした。」この出来事の最中に、ヨセフは目の見えない父親が、長男と次男を間違えているのだと思いました。そして、長子の権を表すイスラエルの右手がエフライムの頭に置かれているゆえに、それを長男マナセの方へと移そうとしました。そこで父親の手をつかんで手の位置を変えようとしたのです。



②こちらが長子です (18)「ヨセフは父に言った。『父上。そうではありません。こちらが長子なのですから。あなたの右の手を、こちらの頭に置いてください。』」その上で言いました。「お父さん。長男のマナセはこちらですよ。右手は、右側にいるマナセの頭に置いてください。」

③弟は大きくなり (19)「しかし、父は拒んで言った。『わかっている。わが子よ。私にはわかっている。彼もまた一つの民となり、また大いなる者となるであろう。しかし弟は彼よりも大きくなり、その子孫は国々を満たすほど多くなるであろう。』」すると、父イスラエルは決然と、意識的にそのようにしている、ということ告げたのです。そして、長男マナセも大いなる一つの民となるけれど、弟のエフライフの子孫は兄の民よりもさらに大きく広がっていくと述べたのです。かつて、次男ヤコブが兄エサウに代わって、長子の権利を得た時には、欺きも交じていましたが、今回はイスラエル自身の意思でした。

3. ともにいてくださる主 (20~22 節)

①光栄な約束 (20)「そして彼はその日、彼らを祝福して言った。『あなたがたによって、イスラエルは祝福のことばを述べる。“神があなたをエフライムやマナセのようになさるるように。”』こうして、彼はエフライムをマナセの先にした。」イスラエルは祝福をこめて言ったのです。「あなたがたは用いられて、イスラエルの民はこのように言い伝えるようになるよ。つまり、「神があなたをエフライムやマナセのようになさる」と言われるほどになるからね。エジプトに生まれ育った彼らが、そのように言われるようになるという光栄の言葉でした。この時にも、エフライムの名は長男マナセよりも先にされていました。

②あなたがたとともに (21)「イスラエルはヨセフに言った。『私は今、死のうとしています。しかし、神はあなたがたとともにおられ、あなたがたをあなたがたの先祖の地に返して下さる。』」さて、これは父イスラエルからヨセフへの遺言です。「神はあなたがたと共におられる。またあなたがたは先祖の地カナンにもどることになる」。ヨセフにとっては、なんととも力強く、慰めの富んだ言葉でした。二人の子供たちへの祝福の言葉と、自分の子孫が約束の地へと戻されるという言葉は、エジプトでこれからも働こうとするヨセフにとって、励ましとなるものでした。

③あなたの兄弟よりも (22)「私は、あなたの兄弟よりも、むしろあなたに、私が剣と弓とをもってエモリ人の手からあのシェケムを与えよう。』」遺言はさらに続きます。ヨセフには 11 人の兄弟がいましたが、ここにはその兄弟たちではなく、ヨセフに与えるものがあるということです。それは、エモリ人のいるシェケムの地を、ヨセフの子孫に与えていくというものでした。シェケム (シケム) はパレスチナのほぼ中央にあり、古い時代からの重要な通路でした。アブラハムが契約の

更新をいただいた地、ヤコブにとっても忘れられない地でした。

《結論》

48 章 13 以下においては二つのことをポイントとして覚えておきたいのです。一つは、イスラエル (ヤコブ) が死の床にあって、ヨセフ

と

相対したときに祝福をしたうえで、マナセとエフライムの頭の上に手おいて祈る時に、弟のエフライムの頭に右手を置いたという点です。それもイスラエルは自覚的にそれをなしたということです。かつて、エサウではなく、弟のヤコブ自身が長子の権を得ました。アロンではなく

弟のモーセが用いられたという例もあります。聖書は秩序をないがしろにはしませんが、必ずしも世の価値観と同じではありません。新約聖書を見ても、キリストの弟子達のリーダーたちは漁師でした。イエスの母として用いられたマリヤも全くの庶民でありました。世の経歴や力に左右されないのです。一方、神は世界宣教開拓をするのには、一流の律法学者でローマ市民権をもち、行動の人でもあるパウロが選ばれてもいます。ともあれ、イスラエルは兄マナセではなくエフライムに長子として、祝福の祈りをささげたという事実から、人間の常識越えて事柄が進むことがあることを覚えたい。いかに弱く小さな存在であっても、いつまでも残るものに目をとめていく信仰に立っていきたいものだ。

第二番目として学びたいことは、イスラエルがヨセフに「神はあなた (がた) とともにおられる」(21 節) と伝えた言葉だ。アブラハム、イサク、ヤコブに伴ってくださった主なる神は、ヨセフに長子の権をさづけ、その子孫と共にいてくださるという約束を与えてくださっています。ヨセフはそれを大変喜んでいました。それでは、神が共にいてくださることは、価値あることなのでしょうか。私たちは、人が共にいてくれることにむしろ価値を見出すのではないのでしょうか。人は話を聞いてくれ、励ましの言葉を与え、具体的な手伝いもしてくれるからです。神は実際的には見えないではないかという意見もありましょう。それは一定の意味では確かなことです。とはいえ、人間を頼ることは、究極的な意味においては避けたいのです。なぜなら、人間は目の前のものにとらわれやすいのです。また人間は罪人であるので、自分の利益を求めやすく、感情に支配されやすく、的外れな道に導きやすいのです。ですから、無限で犠牲的な愛の主である神にこそ、拠り所を見出していききたいのです。祈りをもって、主なる神に近づきたいのです。キリストを通して、見えざる神を私たちは知っていくことができます。主は仰せられます。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる」(イザヤ 41:10)。また復活のキリストは弟子達に「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」(マタイ 28:20)

と約束くださいました。

また私たちにこのような促しと約束をしてくださっています。「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。」(ヨハネ 15:4)。主なる神がともにいて、慰め、励まし、導いてくださることを信じ、祈りつつ、御言葉に導かれ、進んでいこうではありませんか。